

# オリーブの木

No. 62  
2016年 11月



▲スタディーツアーでの一コマ。ヘブロン：イブラヒム・モスク（アブラハム、イサク、ヤコブの墓）の中で、幼い女の子たちと。伝統あるモスクでは、異教徒の女性は備え付けのフード付きコートを羽織らなければならない。

私たちの教育支援先の一つ、エルサレムの聖ヨゼフ学院から、現地の子どもたちの様子などを知らせるお便りが届きました。苦しい環境の中で暮らす子どもたちに、少しでも良い教育を受けさせるために、私たちのささやかな支援が助けになれば、という思いを新たにしました。

現地からは、ヨルダン川西岸のパレスチナの町ヘブロンで英語教育のボランティアをしたスタディーツアー経験者の報告も来ました。ユダヤ人入植者やイスラエル兵に囲まれた厳しい境遇の中で暮らす人々の「穏やかな日常」と、突然襲ってくる暴力の実態を身をもって経験した貴重なレポートです。スタディーツアー経験者といえば、ロンドン便りをもたらしてくれた留学生のほか、10月に東京都内の料理店で「中東料理を楽しむ会」を催してくれたグループもあります。このような若いOB、OGが「聖地のこどもを支える会」の活動を支え、発展させてくれることを期待してやみません。

副理事長 村上宏一、スタッフ一同



認定NPO法人  
**聖地のこどもを支える会**



当NPOは、国際協力NGOセンター（JANIC）によるアカウンタビリティ・セルフチェックを受け、基準の4分野（組織運営・事業実施・会計・情報公開）について適正に運営されていると審査されました。

事務局 〒164-0003 東京都中野区東中野 5-8-7-502 Email [ispalejpn@gmail.com](mailto:ispalejpn@gmail.com) TEL/FAX 03-6908-6571

ご支援は… 郵便振替 **00180-4-88173** 加入者名 「NPO法人 聖地のこどもを支える会」

当法人へのご寄付は、税制優遇が受けられます。

<http://seichi-no-kodomo.org>

# エルサレムからの便り

寄稿者：聖ヨセフ学院 ソーシャルワーカー アベール・アタラ

エルサレム旧市街は、あらゆる意味で、いろいろなものが地球上で最も“凝縮”している町でしょう。1キロメートル四方の壁に囲まれているこの街は、言葉で言い尽くすことはできません。街の歴史は、戦争と平和、愛と憎しみ、そして破壊と再建で織りなされています。

旧市街は小さな地域に分かれており、一戸建ての家もあれば、何百年もの間に中庭の周りに複雑に部屋を建て増していった「ホッシュ」と呼ばれる不思議なアパート群があります。一つの部屋に一家6人かそれ以上の家族が住んでいることもまれではありません。折り重なるようにして建てられた住居にはプライバシーはほとんどないので、社会生活にも個人の生活にも大きな悪影響を及ぼしています。

劣悪な住環境は特に子どもたちに、心理面でも教育面でもまた健康の面でも害を及ぼしています。彼らには通りや路地だけが遊び場なのです。

## 貧しい家庭の子女をあずかる聖ヨセフ学院

聖ヨセフ学院は、エルサレム旧市街の中心にあり、寛容と愛に基づいた女子教育のための学校です。とくに旧市街で貧しい生活環境に苦しむ家庭の子女を受け入れています。その教育の目的は、将来家庭や社会のために働くことができる活動的で独立したパーソナリティを持つ女性を次世代のために育成することです。

## バハ・ジュダのこと

6年生のバハ・ジュダは、家族とともに非常に不衛生で危険な、ぼろぼろの家に住んでいます。屋根が壊れかかっていて、昼間は太陽の光が差し込みすぎて大きな問題です。また先日はキッチン天井が落ちてしまいました。幸い、誰も怪我をしませんでしたが、こんな環境に住んでいるので、家族仲が悪く、両親はとうとう別居してしまいました。

その後父親が病気になり、また同居が始まったのですが、今度は母親が癌になってしまい、何度も手術を受けました。



▲エルサレム：聖ヨセフ学院幼稚園年長組。歓迎の歌を歌ってくれました。

バハは、人見知りで悲観的、いつも独りでいます。12歳にもかかわらず、集中力がなく、あまり身の回りを清潔にしないので、同級生から敬遠されています。おまけにバハには学習障害があります。こんな苦しみを少しでも軽くするために、先生たちは、バハにコーラスに入るよう勧めました。めまぐるしく変わる家庭環境に適応し、困難を克服するために、彼女にはいろいろな支えが必要です。

家庭のひどい環境に加えて、注意力散漫や学習障害のために学校では孤立しているバハですが、芸術的な才能があって、歌を歌ったり、絵を描いたりするのが大好きなので、この分野での才能を伸ばしてあげられたらと願っています。

「聖地のこどもを支える会」からの支援は、バハのような子どもたちの成長を助けようという私たちの試みを、大いに励ましてくれます。これからもご支援をどうぞよろしくお願いいたします。



▲バハ・ジュダちゃん

# ヘブロン滞在記「平和と紛争のはざままで」

西村 まゆき (2013年スタディー・ツアー参加者、大学4年生)

私は今年6月末から7月末までの約一ヶ月間、ヨルダン川西岸地区南部のヘブロンのエクセレンス・センターという語学学校で、小学生から社会人までの生徒に英語を教えるボランティアをしました。

ヘブロンー アラビア語では、アル・ハリール (Al-Khalil) (\*1) と呼ばれるー という町は、ヨルダン川西岸地区の中でも少し特殊な地域です。パレスチナ最大のユダヤ人入植地、キリヤット・アルバアが近くにあることもあり、ユダヤ人入植者による暴力やパレスチナ人の抵抗運動が激しい地域の一つです。イスラエルとの情勢が悪化した2015年10月以降に知り合いを亡くしたという人も、私のホストファミリーを含めかなりいました。また住民のほとんどが敬虔なムスリム (イスラム教徒)、しかも保守的なことでも有名で、そのためイスラエルによる監視もひどく厳しいといわれます。実際私の滞在中にも、友人の家がイスラエル兵によって踏み込み捜査されたり、幾度か町が軍に包囲されたりして、自分の家の出入りさえできなくなったこともありました。

ヘブロンには、入植者の脅迫に毎日さらされるベドウィンの村スーシーヤや、イスラエル軍による若者の一斉逮捕が繰り返される近郊の難民キャンプ、2002年のインティファダや15年秋から冬にかけて多くの犠牲者を出したことで知られるH2(\*2)とシハダ・ストリート「殉教者通り」など、紛争による衝突や暴力行為が日常的に起きている場所は、ほんとうに多くあります。

(\*1) アル・ハリール:「神に愛された人」という意味で、ヘブロンに滞在したアブラハムの別名 (創世記)

(\*2) H2:ヘブロン市は、パレスチナ自治政府が統治するH1地区と、入植地があるのでイスラエル軍が統治するH2地区に2分される。H2にも多くのパレスチナ人がもと住んでおり、入植者との間に衝突が絶えない。

今回ヘブロンでホームステイをすることができたのは、2013年のスタディー・ツアーで出会った現地の友人たちや、現地に留学経験のある友人のおかげでした。

1カ月を過ぎて最も強く感じたことは、ヘブロンには、生き生きと存在感あふれる日常があり、同時にその日常を破る占領があるということでした。家

族、友人、親族など、コミュニティの絆の強い環境で過ぎてゆく時間の豊かさと、容赦なくそれを破る占領と抵抗の激しいミスマッチ。一日一日があまりに豊かで朗らかである分、突然勃発する暴力沙汰とのちぐはぐさに戸惑い、うまく消化できな



▲西村まゆきさん

い気持ちを抱えながら、それでも非常に充実した幸せな1カ月間でした。小学生たちは可愛らしくてエネルギー、新しい刺激に飢えて目をキラキラさせ、遠い日本から来た私に興味津々でした。

学ぶ意欲が高く、教えるそばからぐんぐん伸びていく子どもたち。紛争やパレスチナの社会問題などを、私と同世代の若者たちとディスカッション。興味深く、やりがいがありました。彼らは授業の後もずっと私を追いかけてきて、熱心にアラビア語を教えてくれたり、家や家族の結婚パーティーに誘ってくれたりしました。一方で、たまたま授業で見た映画でホロコーストに触れるシーンには「先生はイスラエルのプロパガンダを擁護するのか」と質問があったり、ユダヤ人大虐殺に賛成する意見が出たりと、状況の複雑さや難しさも肌で経験しました。

滞在中はイスラム教の宗教行事、ラマダンの真最中でした。祈りを欠かさない敬虔なムスリムであるホストファミリーへの敬意をもって、私も、彼らと共に日中の断食と日没後のイフタル (断食明けの晩餐)に参加しました。ファミリーも私を大切にしてくれました。彼らには私がクリスチャンだと伝えてあったのですが、わざわざベツレヘムまで行って十字架の飾りを買ってきてくれ、温かいもてなしに感動しました。保守的で宗教熱心であることは、排他的と同じではないと教えられた気がします。

また、私がヘブロンで出会ったほとんどのパレスチナ人が、2015年10月以降悪化した対イスラエル情勢にもかかわらず、「同じ聖書の民であるユダヤ教徒に対して憎しみはない」と言っており、イス



▲英語の教え子たちとともに。

ラエルの政治と宗教を区別して語る人が多く見られました。このような市民レベルのつながりは沢山あります。内装工事が仕事のホームステイ先の父親は、イスラエル人のお得意さんが沢山いて、「だから自分は少しヘブライ語が話せるんだ」と得意げに話してくれましたし、若者の中には、「会ったことはないけれど、インターネットを通じてイスラエル人の友だちがいるんだ」と言う子もいました。

紛争に関するニュースはほぼ毎日あり、とくに入植地周辺での暴力沙汰は日常茶飯事でした。子どもを含むパレスチナ一家が過激な入植者に殺害され、その報復にパレスチナ人男性が無関係な15歳のユダヤ人少女を刺殺、こんどは入植者がパレスチナ人の車を銃撃した、検問所で若い妊婦が殺された、などなど……。入植地周辺では10代のユダヤ人の子どもたちがマシンガンを肩にかけて歩いているのを見かけたものです。

一方で、日本ではめったに見られない暖かさや豊かさを感じるがあります。休日、風が涼しくなる夕方に、緑豊かな庭に家族やご近所さん、友人たちと座って、庭でとれた果物とミントティーを片手に談笑するひととき、小さい子どもたちが親戚や近所の人々に見守られて無邪気に遊んでいる様子を目にするとときなどです。活気ある市場で人々が和やかに談笑している風景を見ると、「こんなに平和なのに!」と感じることもあります。

平和な景色を引き裂くように、醜いコンクリートの壁や鉄線に囲まれたチェックポイント（検問所）、鉄の監視塔や銃を持った

兵士の姿があります。ある日ホームステイ先の女の子と談笑していた時、上空を戦闘機が通るような轟音が聞こえました。その後ボランティア仲間から「イスラエルがガザでピンポイントの空爆を行ったらしい」とのメールが入ったので、その子に見せました。日頃から気丈な彼女は、いつもは紛争のニュースを聞いても「またか」という感じに肩をすくめるだけなのに、その時は急に泣き出し、「おじいちゃんはガザ出身だから、向こうに親戚や知り合いがいる。心配だ。西岸とガザが分断されて溝が深まっているのがつらい」と言っていたのが忘れられません。

ジェニン難民キャンプに行ったり、カフル・カドゥームの村でのデモを視察したりして、非武装の市民にゴム弾や実弾までもが使われる現実を見られたことは、貴重な体験でした。昼は元気な子どもたちと教室で過ごし、夜は大好きな友人たちとカフェでおしゃべりをして過ごしたヘブロンでの1か月、ほんとうに幸せでした。彼らが一日も早く平和を獲得できるよう、考え続けたいと思います。

スタディーツアーに参加しなければ、ヘブロン滞在の決断には至らなかったかもしれません。「聖地のこどもを支える会」の皆さん、ツアーをとおして出会ったスタッフや日本、イスラエル、パレスチナの友人たちに改めて感謝したいと思います。

あなたの支援を待っている里子たちです。



ザインくん



ジョセフィーヌちゃん



ファディくん

## 顔の見える支援 里親募集中!



マリアちゃん

ある特定の子どもの教育を、毎月一定の支援金で継続的にサポートする里親制度。一歩進んだ国際協力のかたちです。里親と里子の間で、写真や手紙の交換をすれば（任意）、個人的なつながりが持て、子どもの成長を身近に見守ることができます。

お問い合わせは、当法人事務局まで

# 9・11後の世界はどう変わったのか

村上 宏一 (当法人理事・元朝日新聞中東アフリカ総局長)

2001年9月11日に、ニューヨークの世界貿易センタービルや米国防総省の建物にハイジャックされた旅客機が突っ込んだ同時多発テロ事件から15年が経ちました。あの日、筆者はエジプトのカイロの総局事務所にいました。終業間際の現地助手が、ニューヨークのビルに旅客機が衝突したと慌ただしく知らせてきました。大事件ではあっても米国の話だから、頼む仕事はないだろうと帰らせました。そしてテレビのニュース映像を見ていたところ、別の旅客機がツインタワーのもう一棟に突っ込むのが映し出されたのです。これはもう、意図的にぶつけたのは明らかでした。それからは、あれよあれよという間に米捜査当局によってサウジアラビア人、エジプト人などの実行犯が明らかにされ、イスラム過激派によるテロであることがクローズアップされていたのです。

ニューヨークの現場からは、前代未聞の惨劇への驚き、悲しみ、怒りを伝える興奮といってもいいうねりが伝わってきました。そしてカイロにいた筆者はある種、さめた目でニュースを見ていました。

自分も現場にいれば、まずは起きていることを伝えるために夢中になって取材に走り回っていたでしょう。いわば「格好の取材対象」が目の前にあるのです。世界中のマスコミの特派員らにとって、すぐに取材に駆け付けられる「便利な」場所。そして、圧縮された時間の中で千人単位の犠牲者が出た大惨事であり、世界中の注目を浴びる特大のニュースなのです。

筆者の目がどことなくさめていたのは、中東の地から見ていたからでしょう。それは距離的に遠いというだけではありません。中東では、9・11同時多発テロによる犠牲者の遺族・関係者が「なんで罪のない市民を狙うのか」と怒り、悲しんだのと同じ思いを抱かせる出来事が、日常茶飯事のように起きているのです。ただ、その場所がほとんどの場合、すぐには駆け付けられない「不便な」所。しかも1件1件が違う日時、違う場所であればばらばらに起き、犠牲者がいっても1件ごとの数が少ないため、大ニュースとしては取り上げてもらえないのです。

例えば、イスラエル占領下のパレスチナでは、許

可なく家を建て増したという理由だけで家を壊されるということがよくありました。自治移行後も、テロリストの隠れ場所になるなどの理由で民家が破壊されました。2014年夏には、テロリストを狙ったという砲撃で多数の民間人が犠牲になった「ガザ戦争」もありました。圧倒的な武力を持つイスラエル軍や兵士の前に、ほぼ一方的にやられる側の人々の怒りや悲しみの総和は、米国での同時多発テロが引き起こした怒りの総和に勝るとも劣らないかもしれません。怒りが日常的に積み重ねられるため、一瞬に凝縮された惨劇のように派手に報じられないだけなのです。中東からは、この違いが重なって見えるのです。

イスラエル側から「私たちだってロケット弾やテロで犠牲者を出したり恐怖を味わったりしている」という声が聞こえます。もちろん、人の命に軽重はありません。ただ、一つのテロ被害に何十倍もの報復攻撃をする側と、叩きつぶされてやり返すすべのない側の痛みや恨みを同等に受け止めるのは、難しいことです。



十分に報じられない側の思い、ということについては「オリーブの木」53号(2014年8月)にも書きましたが、状況はいっそう悪くなっているかもしれません。千葉大学教授で中東情勢に詳しい国際政治学者の酒井啓子さんが、最近の朝日新聞のコラム「思考のプリズム」(9月14日夕刊)で次のように書いています。

9・11後に生まれ、事件を知らない世代にとっては「世界中で中東起源の『テロ』が蔓延し、無関係だと思ってもいつでも殺戮に巻き込まれる可能性があり、テロには戦争で応え、世界平和には軍事的貢献が不可欠だという、9・11後の世界」が、「生まれたときから存在する『当たり前』の世界」なのだ。

酒井さんは、こうも書いています。「『誰か』を相手に要求を訴え戦う、現実の日常を巡る『戦い』が見えなくなった」と。その例として「イスラエル占領下のパレスチナ人や、難民化し行き場を失ったシリア人やアフガニスタン人」などをあげ、「彼らは、9・11前から繰り返し明確なメッセージを送ってきた。

だが9・11後の、テロリストか否かに二分される世界のなかで、彼らが訴える言葉は『テロリスト』というイメージのなかに追いやられてしまった」と指摘しています。

同時多発テロを受けてブッシュ米大統領（当時）がしたことは、「対テロ戦争」を掲げ、テロを実行したイスラム過激派組織アルカイダと指導者ビン・ラーディンの引き渡しに応じないアフガニстанを攻撃することでした。米国民は、どんな人々がどんな思いで暮らしているか知らない地域で、米軍主導の有志連合諸国が敵をやっつけているのを見て、いわば「留飲を下げた」ことでしょう。そして「対テロ戦争」の標語は、酒井さんが指摘するように、自分たちの日常を変えたいと訴えても見向きもされないことがほとんどの人々を、テロリストの範疇に追いやる傾向をもたらしたのです。

この人々は、強国の圧倒的な武力の前に「留飲を下げる」ことのできない立場にいます。9・11でテロ

による犠牲が大きく取り上げられるのを見て筆者が「覚めた感覚」を抱いたのは、なぜテロが起き、なぜ米国がテロの標的にされたのかという問題の裏にある多くの人々の思いに、世界の目はほとんど向けられないと感じたからでしょう。

ブッシュ大統領の掲げた「対テロ戦争」は、9・11の報復として国民の拍手喝采を受け、大統領を再選に導きはしても、テロの根絶にはつながりませんでした。むしろ、酒井さんも指摘するような「メッセージを届けたい人々のメッセージが届かない」事態を招いています。

イラク戦争がもたらした荒廃の中からIS（イスラム国）のような、残虐な過激組織が生まれてしまった現状では、武力による対処を排除するのは無理なのでしょう。しかし、「テロリスト」という言葉が安易に使われる中で届きにくくなっている人々の声に応える努力なしには、テロをなくすことはできないと、9・11から15年を経て改めて思いました。

## イスラエル・パレスチナを訪れて——現状と課題

本吉 祐樹（イギリス・ニューカッスル大学 博士課程）

皆さま、初めまして。2015年「スタディーツアー・平和を願う対話の旅」参加者の本吉祐樹です。現在はイギリスの大学院で、国際法、とりわけ国際紛争やテロについて研究をしています。ツアーへの参加を通して私が感じたこと、そしてそれが現在の私にどのような形で活かされているかについて書かせていただきます。

10日間で、イスラエル・パレスチナの各地を周り、これまでは本や映像を通じてしか知ることのできなかった実際の有様を、肌で感じることができました。エルサレム、ベツレヘム、テルアビブと、歴史や文化がそれぞれ異なる都市をめぐり、またホームステイを通じて現地の家族と触れ合うことで、複雑な状況が続いているパレスチナ情勢について理解を深めることができました。さらに、小学校や養護施設など、なかなか観光では訪れることができない施設を訪問する機会にも恵まれました。

エルサレムでホームステイをさせていただいたヤクブ家は、大変アットホームなパレスチナの家族で、皆で食事をし、語り合い、まさに一つの家族のように時間を過ごすことができました。また家もエル

サレム旧市街のキリスト教地区という歴史ある場所に位置し、夜景の美しさもまた素晴らしいものでした。テルアビブでの、イスラエルの家庭においては、ホスト先の学生とイスラエル、パレスチナの現状やその今後について忌憚無く意見交換をすることができました。

そして、極めて印象深かったものが、パレスチナの分離壁の視察でした。これは私が、イスラエル・パレスチナに関心をもった最大のきっかけでした。この壁は、テロ対策としてイスラエル政府によって2002年頃から築かれましたが、その多くがパレスチナの領域に食い込む形となり、町が分断されるなど、影響を及ぼしています。私は自身の研究において、この分離壁についての様々な資料に目を通していたため、実際の壁を目にした時の感慨は大きなものでした。また、その後の施設やベツレヘム市長との会見などから、分離壁が計り知れない影響をパレスチナの人々に与えていることを理解しました。

これらを含め、このツアーで体験したイスラエル・パレスチナの現状をとおして、研究者を志す自らの足元を見つめなおし、考える契機となりました。

私の専門分野である国際法は、国際秩序の安定と国際平和の実現を大きな目的としております。しかし、残念ながらイスラエル・パレスチナは、いまだ平和の実現と安定には至っていません。イスラエル・パレスチナのみならず、イラクやシリア、さらに南シナ海など世界各地でも起こっていることについて、研究者の取り組みが求められると考えます。

スタディーツアーを機に、さらに研究を進め、困難を抱えた人々の苦しみを少しでも和らげられるような法整備や、制度構築などを考え、少しでも平和を

創る手助けをしていきたいと思っております。平和というのは、盲目的に願って実現するものではなく、不断の積極的な働きかけによって築くものです。特にパレスチナ情勢の安定には、日本の力が大いに必要とされており、幅広い支援が求められています。私もイスラエル・パレスチナと今後も関わりを持っていきたいと思っております。

苦しい状況に置かれているイスラエル・パレスチナの子どもたちに笑顔が訪れる日が、1日も早く来るよう心から願っています。

## フード・イベントを開催しました！

～中東料理を食べて、イスラエル・パレスチナを知ろう～  
浅野耕二（当NPO法人事務局長）

2016年10月16日、当法人のユースグループが主体となってフード・イベントを開催しました。会場は東京・六本木にある中東料理レストラン『アルディワン』。中東料理を楽しみながら、イスラエル・パレスチナの歴史や文化・現状にふれてもらうことが目的でした。当日は店を貸切りにしてもらい、約40名の若者が参加してくれました。

ユースメンバーの挨拶と乾杯でスタートし、ビュッフェ形式の料理を楽しみながら、参加者同士が交流。初めて出会った人たちも、すぐに仲良くなって話しが弾んでいました。

途中で、オーナーシェフのシャディさんとスタッフの田中さんから料理と現地の状況の説明がありました。また、当法人の簡単な活動紹介と、2017年のスタディーツアーについても案内しました。



▲フード・イベントを企画したユース・グループのメンバー。プロジェクトやスタディーツアーの経験者です。

あっという間に2時間が過ぎ、大盛況のうちにイベントを終了することができました。

今後も、勉強会や交流会などを実施する予定です。イベントのご案内は、当NPO法人のホームページやFacebookなどでお知らせいたします。中東文化や現状について知る良い機会ですので、ぜひともチェックしてください！

皆様のご参加をお待ちしております。

## 2017「平和を願う対話の旅」スタディーツアーのお知らせ

イスラエル、パレスチナを訪ねて、聖地と世界の平和を考えるツアー「平和を願う対話の旅」、2017年も実施します！

支援者・里親の皆さま、支援して下さっている子どもたちに会いにいらっしゃいませんか？「聖地の子どもたちの今」を見てやってください。



【プログラム】 エルサレム、ベツレヘム、テルアビブで、現地の子どもたち、青年と交流。学校や各種施設を訪問。難民キャンプ、分離の壁、検問所の見学、死海観光など。学生は各地でホームステイも体験します。

日時：2017年3月2日(木)～13日(月)

【12日間】(予定)

参加費：約340,000円(おとな)

約275,000円(学生)

お申込み期限：2016年12月21日(水)

## 西村まゆきさんとヘブロンの仲間たち 1ヶ月の滞在中にたくさんの仲間ができました。(P3の記事を参照ください)



### 街で



▲パレスチナ女性の民族衣装。手刺繍で模様も伝統的なものです。



▲オリエンタルサラダ。これは前菜だけ！



▲学校帰りの少年たち。(ベツレヘム)

### ハンド・イン・ハンド学園 (エルサレム) で



▲幼稚園から高校まで、イスラエル人とアラブ人(パレスチナ人)が共に学ぶ学校、ハンド・イン・ハンド学園。言語はヘブライ語とアラビア語。校長もクラス担任もペアで2人ずつ。



▲東京・六本木の中東料理店「アルディワン」でのフード・イベント。エキジチックな料理で、初対面の方ともなごやかに対話しました。